たとえばこれ！「こう書け！」シリーズ

1. 事例形式の問題には事例図を表記してわかりやすく

2. 論証例はそのまま答案で書きるようにコンパクトに

3. 各論点の重要度は4段階で表示してメリハリを

4. 勉強の意欲のための口語の「コラム」を掲載

5. 受験生が頭がもたないポイントを「コメント」で指摘

96条3項の「第三者」

Q AはBに売却されて自己所有の甲土地をBに売却し、BはこれをすぐにCに転売した。Cは、AとB間の事情について善意であったのが過失があった。しかし、登記はまだBのものである。その後、Aが、Bとの契約を取り消した場合、Cから土地を取り戻すことができるのか。

AによるAとB間の売買契約の取消によりBは当初から無権利となった（17条参照）。登記に会意力がない以上、Cも甲土地の所有権を得ることができないのである。そこで、Cが96条3項の「第三者」にあたると、「第三者」（96条3項）の意味が問題となる。

この場合、「第三者」（96条3項）と、取引前に取引関係に入った第三者をいうと解する。

さて、96条3項の趣旨は、取消の意思表示（121条参照）により権利を奪われる第三者を保護し、もって取引の安全を図る点にあるものである。

さて、善意が有過失であるCは、「善意」の第三者（96条3項）として保護されるか、「善意」は善意無過失を意味するのかが問題となる。

この場合、「善意」とは、単に善意であろうと、過失の有無を問わないと解する。

なぜなら、条文上「善意」とか規定していないし、また、被欺値者にも過失がある以上、第三者保護の要件を厳しく見ることがないからである。